



オープンハウス

greentea0117

オープンハウス

用もないのにオープンハウスに行く人は多いのだろうか。多分少ないだろう。自分でもどうして趣味がオープンハウス巡りなのかよくわからない。独り者で家を買う気も財力もない。でも夢をみたいのかもしれない。間取り図を見て、三LDKは一人では広すぎるから、誰かとシェアしたほうがいいかとか、この一LDKは狭いけど、コンロがあるから何とか料理はできるなとか、いろいろと考える。考えるのはただだ。

「こちらは駅からも近く、コンビニ、スーパーは歩いて五分のところにあります。日当たり良好で、お値段もこの広さから考えると安いほうかと思えます」

あるとき熱心に勧められ、その若いセールスウーマンが気の毒になり、

「いえすみません、私、ちょっとふらっと立ち寄っただけなんです」

と言うと、その人はにっこりと笑い、

「そうですか。それはありがとうございます。また引っ越しのご予定などございましたらよろしくお願いします」

と言い、立ち去ろうとしない。

「えーと、私、実は休日ごとにオープンハウスを巡るのを趣味にしてまして……。悪気はないんですけど、新しい家を見たり、間取り図を見たりするのが好きなんです。奇妙な趣味というか」

というと、

「あ、わかります、その気持ち！」

とその人は言った。

「私も間取り図を見るのが好きで好きで、それでこの会社に就職したくらいで。大学は本当は建築関係の学部に行きたかったんですけど、おつむがついていなくて。で、今はこの仕事をしています」

と言った。

――

「間取り図を見ていると」

私は言った。

「いろいろ夢みれますよね。それこそバージョンは無限で」

「ふふ」

セールスウーマンは同意した。

「でもこうやってオープンハウス巡りを趣味にすると、なんらかのかたちでそれが現実になるのが怖い気がします」

私は言った

「と言いますと？」

「いろいろ空想を膨らましているうちは楽しい。でももしいざそれが現実になったら？ 見るだけだった素敵なマンションに本当に住むことになったら、私のオープンハウス巡り終了です。そして多分、現実には素敵なことではないし」

「だからこそそのオープンハウス巡りなんですね」

セールスウーマンはしたり顔でうなずいた。多分ずっと年下であろう彼女に、こんな幼稚な胸の内を語ってしまったことを恥ずかしく思う。

――

胸の内を語ってしまうと、なんだか自分で自分の種明かしをしたようで、オープンハウスに行く気がなくなってしまった。そもそもが不毛な趣味だったのだ。他に趣味を見つける気にもならず、休日は家でごろごろするばかり。

「ああだめだ」

私は呻いた。どうしてもやっぱりオープンハウスに行きたいのだ。

――

「そんなにオープンハウスが好きなら、うちの会社とか、建築関係の仕事、あたってみたらどうですか」

すっかり顔見知りになった、例のセールスウーマンが言う。

「そうだけど今更職変えるのもめんどくさいしさ。一生不毛のオープンハウス巡りだよ」

最初こそ遠慮していたけど、彼女の前では素になってしまう。彼女も最初こそ客扱いしてくれたけど、今ではすっかりオープンハウス仲間だ。

「そうそうこのキッチン、すごいんですよ。水回りが工夫されてて」

私は彼女が説明してくれる、アイランドキッチンに立ってみた。色とりどりの野菜が置かれ、それを料理を作るのだと想像する。この広い部屋でホームパーティを開くのだ。

「ああ、だめだ」

私は呻いた。

「それは言っこなし」

彼女はキッチン横のドアを開けた。そこはパントリー、食糧庫になっていた。細長い空間で、ウォークインクローゼットのように、入っていてもものを整理できる。何かを隠せそうな場所だ。何を隠そう？

私はしばらく考えた。昔の恥ずかしい写真とか？ 旅行先で買った珍しい化石とか？ だめだ、私には人に隠したい何かすらないらしい。こんな素敵な隠れ家のようなスペースがあるというのに。

「これをモチベーションに働いたら」

私が言うと、

「何の役にも立たないからこそ楽しいんですって、きっと」

彼女は言った。

風車

大きな風車がぐるぐると回るのをびっくりして見上げた。おんぼろだった朽ち果てた風車が、いつの間にこんなにきれいによみがえったのだろう。第一なんのためによみがえらせたのだろう。昔は風車で粉をついていたというけど、この風車はいったい何のために回っているのだろう。

風車の前でもじもじしていると、老人が出てきた。

「入るか？」

老人は言った。中も寸分たがわず復元されているようだ。歯車が回り、大きな柱がピストン運動している。その下に粉を入れた臼がないだけだ。

「これはまたすごいですね」

私は言った。

「ああ、昔と同じままだ。実用には何の役にも立っていないけどね」

「どうしてまた復元することになったんですか？」

「さあ、私が勝手にやったんだよ。今は時々観光客が来るね」

「ということはこの風車、あなたのものだったということですか」

「そうさね。私が子供のころはまだ使われていたけど、そのうち使われなくなって、でも原型はとどめていた。何十年かぶりに帰ってみると、荒れ放題になっていて、それでちょっとずつ直していったんだよ。他にすることもなかったし」

ほかにすることがないからと言って風車を修理したりできるものだろうか。すると老人は察したように、

「一応物を作る仕事をしていたんで、木やトンカチを扱うのは慣れてたのさ。でも風車なんて作ったことないから、失敗の繰り返しよ。設計図すら描けない。それでいろんな人に聞いて回って、手伝ってもらって、今はなんとかちゃんと動いているが」

粉をつくことはないけど、昔のように力強く大きく回っている風車。

――

「私もこの出身なんですが、私はすっかり朽ちてしまった風車しかしらなかったんで、久しぶりに帰郷して、びっくりしました。なんか別のところに帰ってきたみたいです」

「じゃ、あんたには悪いことをしたかな」

老人は笑った。

「昔は風車といえば大切な労働エネルギーだったわけだ。自分でもどうしてこんな面倒なものを動かしているのかよくわからん。でも風車が回る音を聞いているとよく眠れる」

「ここに住んでるんですか？」

「ああ。ほんとは小さい家があるんだけど、今はそっちのほうが廃墟になりかねないよ」

ごうんごうんとかかなり大きな音がする。でも確かに、聞きなれば落ち着く音なのかもしれない。

――

「風車の中に住む……いいですね」

僕が言うと、

「まあね。でも修理はしたといっても、しょっちゅうあちこち壊れるし……。風車を回すのも楽じゃないよ」

老人は口ではそう言いながら楽しそうだ。僕は心底老人がうらやましくなった。

「いいですね。僕も修理しなくちゃいけない風車を持ってればいいんですが」

「それはねえ、自分で探しなさい」

老人は言った。

天才パティシエ

天才パティシエの朝は早い。五時から仕込みを開始する。店のオープンは十時。天才も楽ではない。

そもそも天才と呼ばれるようになったのは、テレビに出たからだ。テレビはとにかく大げさだ。確かに「天才」とすれば視聴者の関心を引くだろう。けれど私は六年ほどまえ、とある海外の菓子コンテストで優勝した経歴こそあれ、それで天才と言われるほどの何かすごいものを持っているわけではない。ただ、むかしからお菓子のことばかり考えてきた。幼稚園の画用紙は様々なお菓子の絵で埋め尽くされた。小学生のころは授業中、料理本ばかりを読み、中学は学校が終わると、お菓子ばかり作っていた。高校はお菓子作りの技能が学べる高校へ行き、卒業後はフランスに飛んだ。そこでパティシエに師事し、コンテストの優勝トロフィーを手に帰国し店を開いた。我ながら、一つのことしか考えることのできない性格だなとは思う。

私は今二十八歳だ。菓子ばかり食べているが、いっこうに太らない。髪は伸びてきたら自分で適当に切っている。そういう風貌もテレビの画的にはわるくないらしい。「天才」と言ってもらえ、宣伝までしてもらえる。感謝すべきだろう。

天才パティシエの趣味はラーメンの食べ歩きだ。これもテレビ的にはおもしろいかもしれないが、誰にも言っていない。天才だって息抜きはしたいのだ。甘いものばかり食べていれば、しょっぱいものが食べたくなる。白いコック服を脱げば、誰も私に気付きはしない。豚骨ラーメンをネギましましで食べているとき、それが心から一息つけるときなのだ。

いつものように仕事の後、店のカウンターの隅でラーメンをすすっていると、「それでテレビで天才パティシエっていうのやってて」

と話すのが聞こえた。ちらと見ると、席一つ開けて、サラリーマン風の男が二人話していた。「なんか作ってるデザートも凝ってるのかもしれないけ、特に食べたいって思わないわけ。でもこのパティシエっていうのがさ」

男は派手にラーメンすすってから言った。

「なんか目立つっていうか。美人じゃないんだけど。全然。なんていうかなあ」

「このみてこと？」

「うーん」

この二人の男の話をもとめると、その女は美人ではないが、なんとなく気になる、ということらしい。それ、私ですよ、よっぽど言ってやろうかと思ったけれど、特に好みの感じでもない。おしのびラーメン店を失うのもいやだ。

「すみません、もう一杯ください、同じの」

カウンター越しに頼み、メニュー表を精査していると、誰かが隣に座った。ちらとうかがうと、サラリーマン二人組が席を移動してきていた。

――

「すみません、さっきの話、聞こえてましたよね」

一人が言うので、

「ええ」

と言い、なんで気づいたんだろうかと思った。

「ふと隣みたら、本人いるんでぎょっとしました」

「ふつう、気づかれませんか。気づかれたとしても、声かけられたことないです」

「はは、厚かましくてすみません。でもこんな機会ないんで」

「好みじゃないんですか？」

「はあ、だからまあ、よけいに声、かけやすかったんです」

私はため息をついた。行きつけが一つ消えた。すごくおいしい豚骨スープだったのに。

「そう、ですか」

「僕ら同い年ですよ。テレビ見て、同い年とは思えないな」と

「お菓子作れるからって、なんでもできるわけじゃないですよ。それに私のお菓子は凝ってるけど特に食べたいとは思わないんですよね」

「いやー」

隣のサラリーマンは頭をかいた。

「すみません」

「別にいいです。よく聞くことなんで」

私はさっさと離れたくて、席を立った。サラリーマンは何か言いたげだったけど、私の知ったことではない。

――

でも考えてみれば、部屋に戻った私は思った。「すごく凝っていて、見た目も味も良くて、特別な時に食べたいお菓子」「高くて庶民向けではない」そんなことわかってやっていた。すべての人を満足させられるお菓子より、自分の持てる技術を注ぎ込み、なおかつ注文の入るお菓子。自分の作ったお菓子が売れさえすればよく、それ以上は考えなかった。でも直接聞いた、「特に食べたいと思わない」は腹立ちが収まれば、それがあの人の素直な感想なのだと思い、もやもやとした気持が残った。私は天才パティシエなどではなく、ただ一介の菓子職人なのだ。

テレビボケも収まり、ずるずるとラーメンを食べていた。うまい、しょっぱい！

「いやーまたお会いできるとは思いませんでした」

はっと顔を上げると、例のサラリーマンだった。私は店内を見回す。もう二度と来ないと思っていたのに、しばらくするとすっかり忘れて同じ店に来てしまっていたのだ。

「ああ、はい、どうも」

最近は声をかけられようが、どうでもよくなっていた。身構えるほうが疲れる。

「それにしてもあなたもよく凝りませんね」

私が言うと、

「ああはい、よく言われます。そういうとこだけが自分の長所かと。短所かもしれませんが」

サラリーマンはわははと笑った。私はちょっと黙り、聞いてみた。

「私のお菓子の率直な感想をどうぞ」

「え？ テレビで見ただけですよ」

「それでもいいです」

「なんていうかなあ、これでどうだ、完璧なんだぞ、みたいな、そういう感じです」

私はラーメンの残りの汁をすすった。

「すみません、おかわり、ネギましまして！」

カウンター越しに声を張った。